

「蟹工船」 ★★★

2009（平成21）年7月10日鑑賞<テ

アトル梅田>

監督・脚本：SABU

原作：小林多喜二『蟹工船』（新潮社刊）

プロデューサー：宇田川寧 豆岡良亮

新庄（漁夫）／松田龍平

浅川（博光丸の監督）／西島秀俊

根本（雑夫）／高良健吾

塩田（漁夫）／新井浩文

清水（雑夫）／柄本時生

ロン（支那人）／手塚とおる

雑夫長／皆川猿時

2009年・日本映画・109分

配給／IMJエンタテインメント

<「蟹工船ブーム」はホンモノ？>

私はプロレタリア文学として有名な、小林多喜二の『蟹工船』と徳永直の『太陽のない街』を学生運動を始めた大学1回生の夏休み（1967年）に読んだが、はっきり言ってそんなに面白いものでも、感動を覚えるものでもなかった。そんな『蟹工船』が昨今にわかに若者たちの人気を集めたのは、08年秋のアメリカ発の世界的金融危機の影響をモロに受け、ワーキングプア、派遣切り、ネットカフェ難民などのキーワードがマスコミを賑わしたため。その結果、若者たちの日本共産党への入党者が増えたというから、いかにも熱しやすく冷めやすいこの国のブームには困ったものだ。だって、そんな若者が日本共産党が目指す地道な日常活動をやれるとは到底思えないから、「蟹工船ブーム」に飽きたらすぐに離党？

このように、私は「蟹工船ブーム」はあくまで一時的なブームであり、日本の置かれた政治経済状況や問題点を正確に分析するうえで何の役にも立たないばかりか、かえって有害であると感じている。もっとも、機を見るに敏な映画界では、そんなブームに乗らない手はないとばかりに08年7月に『蟹工船』企画がスタートし、監督・脚本はSABUに決定。しかして、SABU監督が書いた脚本は？SABU監督が目指した映画は？

<新聞紙評では高評価だが、私は？>

本作は、09年7月2日付読売新聞夕刊では満田育子氏の「イチオシ」に、7月3日付大阪日日新聞の高橋聡氏の「一本見るなら」に、それぞれ取り上げられている。また、7月3日付日本経済新聞夕刊の「シネマ万華鏡」では、村山匡一郎氏は星4つと高評価。しかし、私は？

本作が漫画チックでSFチックなエンタメ作品に仕上がっていることは一目瞭然だが、3人の評者が本作を高評価したのは、それぞれ①「労働者、元気にしたい」、②「悲壮感よりもプラス思考の哲学」、③「個人の変革に置き換え」、とSABU監督が意図した本作の前向き性を認めたためだ。たしかに、本作のラストはこれしかないという前向き志向で終わるのだが、それは私が小林多喜二の原作本を読んだ時の印象と全く正反対で、違和感がある。だって、あれだけ日本共産党が弾圧されていた時代に、いくら何でも本作のような根拠のない前向き志向になれるはずがないのでは？派遣切りで困っている今ドキの若者が本作を観て前向き志向になったとしたら、以降彼らは具体的にどんな行動を？

<よくあれだけ井戸端会議が>

本作のエンタメ性は「こりゃ、まるで舞台！」と錯覚させるような博光丸内にある蟹缶の加工場と労働者部屋。加工場内にも、複雑に組み合わされた歯車と次々と流れていくベルトコンベアーが、人間社会の「歯車性」を象徴していて面白い。また、決起した時の労働旗(?)とハチマキに描かれる絵柄も面白い。他方、カプセルホテルのような狭いベッドは当然だが、意外なのは労働者部屋の真ん中に、会議するのに十分な広い空間があること。現実にはこんな広い空間を虫ケラのような労働者に与えることはありえないが、本作で目立つのはそこで再三開かれる(井戸端?)会議。一方では、眠る時間もないほど働かされているのに、よくあれだけ議論する時間がとれるものだと変に感心。

冒頭にもみる、漁夫の新庄(松田龍平)の音頭で集団首つり自殺を試みるシーンはあまりにもバカげているが、その後この空間はさまざまな井戸端会議に使われ、さまざまなテーマが話し合われるから、その集団討議の様子に注目。

ここで私が気に入らないのは、1人の発言にすぐにみんなが傾いてしまうこと。

こんなに簡単に労働組合が結成でき、団交やストライキができるのなら、小林多喜二だって『蟹工船』を書くのにそんなに苦労しなかつただろうし、自分自身も獄死しなくてもすんだのでは？

<浅川思想は？価値観は？>

本作の主演は、思想的には未熟ながら労働者を代表する(?)新庄と、資本家を代表(代弁?)する博光丸の監督浅川(西島秀俊)。浅川の主張は、カムチャッカ沖での蟹漁という仕事は国家的事業だから、戦争と同じ。したがって、労働者たちはそんな国家的使命のために死ぬ気で働けというものだが、そんな高尚な主張があのレベルの漁夫・雑夫たちに理解できるの？

私が不満なのは、本作では浅川という人物像の背景が全く描かれていないため、なぜ彼が博光丸に監督として乗っているのか？そして、なぜそんな思想や価値観の持ち主になったのかがサッパリわからないこと。そんな小難しいことを言いながら、漁夫や雑夫たちを殴ったり蹴ったりするより、漁夫や雑夫たちがあんなに長時間井戸端会議をしている様子をちゃんとチェックし、労働組合の結成を阻止するための具体的行動をとるべきでは？

雑夫長(皆川猿時)がいかにも粗暴なだけの男であるのに対し、あえてクールな印象の西島秀俊をキャストしたのなら、浅川にはもっと知的な労務管理をする姿を見せてほしかった、と私は思うのだが・・・。

<こんな映画には、太った俳優の起用は厳禁？>

映画冒頭、超クローズアップで映るのは、箱を少し開けて外の様子を探っている2つの目。後にこれは脱走を試みた宮田の目だということがわかるが、宮田は頬がげっそり、身体もガリガリだから、いかにも劣悪な労働条件下にあることを身体で表現できている。しかし、集団討議(?)の場で、新庄の説得に異を唱える男たちの中には、丸顔でメタボ腹気味の労働者も・・・。

佐々部清監督の『出口のない海』(06年)の大失敗は、回天搭乗員の主人公にちょっと太めの市川海老蔵を起用したこと(『シネマルーム12』223頁参照)。あの体型で明治大学のエースピッチャーという設定も無理筋だったが、やっぱりあの時代の回天搭乗員はげっそり痩せていなければ。ましてや、ロクな食料も与えられず、最悪の労働条件下にある蟹工船の漁夫や雑夫が太り気味では、あまりにナンセンス。こんな映画には、太った俳優の起用は厳禁？

<清水の演説の説得力は？>

本作は漁夫や雑夫のセリフのたびに、彼の頭の中で描かれる回想シーンが登場するのでかなり白けてくるが、一番若い雑夫清水(柄本時生)のそれは、天国も地獄も自分の心の中にあるという和尚さんの言葉。博光丸内での労使の矛盾が次第に激化し、労働が超過重となり、疲労困憊した清水の意識が薄れていく中、加工場内は彼の頭の中に描かれる地獄と全く同じ状況になったから大変。さあ、ここでブチ切れてしまった清水の、先輩漁夫・雑夫たちに対する思いのたけの言い分は？

もちろん、ここでの彼の主張は正論だが、それが誰も実行できないのが悩みの種。そこで、次に彼がどんな行動をとるのかと注目していると、何と彼の行動は？それはあなた自身の目で確認してもらいたいが、やはりこんなガキの思いつきの演説では、全然説得力なし？

<百聞は一見に如かず？一見も一聞も同じ？>

本作のエンタメ性、というよりハチャメチャ性の最たるものは、乗っていた釣船が博光丸からはぐれ、ロシア船に救助された新庄と塩田(新井浩文)が一気に思想転換してしまうシーン。極寒の地カムチャッカ沖で蟹漁をする厳しさは日本もロシアも同じだが、美女たちと共に歌い踊りかつ飲み食いしているロシア人漁夫たちに、新庄も塩田もビックリ。さらに、そこにロシア人監督まで入り込んで和気あいあいと一緒に踊っているから、さらにビックリ。

「百聞は一見に如かず」ということわざどおり、言葉は通じなくてもこの風景を見ただけで2人がカルチャーショックを受けたのは当然。さらに、そこに登場した奇妙な支那人ロン(手塚とおる)が単なる通訳ではなく、偉大な思想家(?)だったから私もビックリ。生きるとは？自分の意思とは？夢とは？自由とは？そして自分が今やりたいこととは？ロンが語るそんな言葉に、2人は目からうろこが落ちたようだが、こうなると一見も一聞も同じ価値？

そんな思想転換をした2人が博光丸に戻った後の、新庄の大活躍が本作最大の見どころだからそれに注目を。さあ、新庄の熱っぽい演説を聞いた労働者たちの意識の大転換と行動力は？